

第5分科会

【演題等】「大阪府発！教職員の同僚性・協働性の備わった学校づくりにむけて」

【講演・発表者】大阪府教育庁市町村教育室小中学校課

参事 中野 悟志

生徒指導グループ

主任指導主事 家村 憲治

【座長・司会】新井 肇（関西地区研究会会長）

・発表概要

いじめや不登校等の生徒指導上の諸課題への対応や、「発達支持的生徒指導」の取組に進捗が見られる学校では、校内の教職員間で目的等を共通理解し、「チーム学校」として取り組めるよう働きかけることをポイントとしている。本分科会ではそうした教職員の同僚性・協働性を備えるための参考となる具体的な実践や工夫についてお伝えする。



・発表要旨

1 大阪府の現状

大阪府では、不登校となる子どもたちの増加に加え、不登校となる時期の低年齢化や、一旦不登校になると次の学年でも継続する傾向があることをふまえ、魅力ある学校づくりとして、「発達支持的生徒指導」等を進めてきた。しかし、各校においては、教職員の同僚性・協働性が備わっていないことで、それぞれの取組が定着しにくいということを伺うことがある。そこで、本分科会では教職員の同僚性・協働性の備わった学校づくりに向けたポイントやツール、府内の実践事例等についてお伝えする。

2 大阪府が考える同僚性・協働性を備えるためのポイント等

大阪府教育庁が考える教職員の同僚性・協働性を備えるための具体的なポイントとして、

Point 1…「『めざす子ども像』実現に向けたグランドデザイン」の明確化

Point 2…「チーム学校」が機能する学校組織に向けて、教職員の同僚性・協働性を高める場やツールの設定

Point 3… Point 1、2をふまえたうえで、「重層的支援構造」に係る取組を検証する指標等の設定

3 大阪府内の実践事例

大阪府内の各校で、同僚性・協働性を高めながら進めた実践事例の紹介

(1) 「めざす子ども像」実現に向けた取組

学校の生徒指導体制の土台にある「めざす子ども像」に基づいて、子どもが実践すべき「望ましい行動様式」を設定する過程で、教職員と子ども双方に働きかけながら進めてきた取組の紹介。

(2) 「発達支持的生徒指導」に位置付く取組み

学校生活の大半を占める授業は、すべての子どもを対象にした「発達支持的生徒指導」を実践する絶好の機会。「発達支持的生徒指導」を意識した特別活動や教科活動において、学習指導と生徒指導の一体化に向けて、生徒指導担当教員と学力担当教員が連携し、教職員の資質向上や環境整備を行いながら、効果的な取組とした事例の紹介。

(3) 専門家と連携した「課題未然防止教育」の取組

生徒指導上の課題解決に向けて効果的に取組を進めるにあたり、スクールカウンセラー等専門家と連携することは不可欠。3年間かけて、生徒指導体制のシステム化や教職員研修、いじめ未然防止教育等を専門家と連携しながら、計画的に「チーム学校」が機能する組織体制を構築した事例の紹介。

・質疑応答の概要

- Q 実践事例を聞いて、どの事例も管理職や生徒指導担当者がリーダーシップを発揮している様子だった。これらの学校が取り組みを始めたモチベーションやきっかけは何なのか。また、そのモチベーションを継続するための工夫をお聞きしたい。
- A きっかけとして共通することは、子どもの課題に正対し「子どもをどう成長させるか」という思いを取り組みのスタートとしていること。「こんな子どもに育ってほしい。」ということを教職員が「自分事」として話し合う等の機会を経ることで、モチベーションの高まりにつなげている。継続する際も同様に、取り組みありきになってしまうと、いずれ形骸化してしまうので、都度、子どもの課題や取り組みの成果を見直しながら、「何のためにやるのか」を教職員がお互いにすり合わせながら進めることが大切。

・記録者雑感

小中学校の管理職や、生徒指導主事等の方の参加が多く、大阪府内の小中学校の実践事例の報告に、熱心に聞き入っておられる様子から、どの自治体、学校でも教職員の同僚性・協働性を備えることへの関心の高さが伺えた。

また、発表は、指導主事2名の掛け合いで進めたこともあり、会場から笑いが生まれ、終始なごやかなムードだった。